

☆受難の主日(4月2日)の聖書朗読☆ ※主任司祭からの解説があります。

福音朗読 (マタイによる福音書 21章 1～11節)

イエスの一行がエルサレムに近づいて、オリーブ山沿いのベトファゲに来たとき、イエスは二人の弟子を使いに出そうとして、言われた。「向こうの村へ行きなさい。するとすぐ、ろばが見つないであり、一緒に子ろばのいるのが見つかる。それをほどいて、わたしのところに引いて来なさい。もし、だれかが何か言ったら、『主がお入り用なのです』と言いなさい。すぐ渡してくれる。」それは、預言者を通して言われていたことが実現するためであった。シオンの娘に告げよ。

『見よ、お前の王がお前のところにおいてになる、柔和な方で、ろばに乗り、荷を負うろばの子、子ろばに乗って。』

弟子たちは行って、イエスが命じられたとおりにし、ろばと子ろばを引いて来て、その上に服をかけると、イエスはそれにお乗りになった。大勢の群衆が自分の服を道に敷き、また、ほかの人々は木の枝を切って道に敷いた。そして群衆は、イエスの前を行く者も後に従う者も叫んだ。

「ダビデの子にホサナ。

主の名によって来られる方に、祝福があるように。

いと高きところにホサナ。」

イエスがエルサレムに入られると、都中の者が、「いったい、これはどういう人だ」と言って騒いだ。そこで群衆は、「この方は、ガリラヤのナザレから出た預言者イエスだ」と言った。

第一朗読 (イザヤの預言 50章 4～7節)

主なる神は、弟子としての舌をわたしに与え疲れた人を励ますように言葉と呼び覚ましてくださる。朝ごとにわたしの耳を呼び覚まし、弟子として聞き従うようにしてくださる。主なる神はわたしの耳を開かれた。わたしは逆らわず、退かなかつた。打とうとする者には背中をまかせひげを抜こうとする者には頬をまかせた。顔を隠さずに、嘲りと唾を受けた。主なる神が助けてくださ

るからわたしはそれを嘲りとは思わない。わたしは顔を硬い石のようにする。わたしは知っているわたしが辱められることはない、と。

第二朗読（使徒パウロのフィリピの信徒への手紙 2章6～11節）

キリストは、神の身分でありながら、神と等しい者であることに固執しようとは思わず、かえって自分を無にして、僕の身分になり、人間と同じ者になりました。人間の姿で現れ、へりくだって、死に至るまで、それも十字架の死に至るまで従順でした。このため、神はキリストを高く上げ、あらゆる名にまさる名をお与えになりました。こうして、天上のもの、地上のもの、地下のものがすべて、イエスの御名にひざまずき、すべての舌が、「イエス・キリストは主である」と公に宣べて、父である神をたたえるのです。

受難の朗読（マタイによる福音書 27章11～54節）

それから、イエスは総督の前に立たれた。総督がイエスに、「お前がユダヤ人の王なのか」と尋問すると、イエスは、「それは、あなたが言っていることです」と言われた。祭司長たちや長老たちから訴えられている間、これには何もお答えにならなかった。するとピラトは、「あのようにお前に不利な証言をしているのに、聞こえないのか」と言った。それでも、どんな訴えにもお答えにならなかった。そこで、総督は非常に不思議に思った。ところで、祭りの度ごとに、総督は民衆の希望する囚人を一人釈放することにしていた。そのころ、バラバ・イエスという評判の囚人がいた。ピラトは、人々が集まって来たときに言った。「どちらを釈放してほしいのか。バラバ・イエスか。それともメシアといわれるイエスか。」人々がイエスを引き渡したのは、ねたみのためだと分かっていたからである。一方、ピラトが裁判の席に着いているときに、妻から伝言があった。「あの正しい人に関係しないでください。その人のことで、わたしは昨夜、夢で随分苦しめられました。」しかし、祭司長たちや長老たちは、バラバを釈放して、イエスを死刑に処してもらうようにと群衆を説得した。そこで、総督が、「二人のうち、どちらを釈放してほしいのか」と言うと、人々は、「バラバを」と言った。ピラトが、「では、メシアといわれているイエスの方は、どうしたらよ

いか」と言うと、皆は、「十字架につけろ」と言った。ピラトは、「いったいどんな悪事を働いたというのか」と言ったが、群衆はますます激しく、「十字架につけろ」と叫び続けた。ピラトは、それ以上言っても無駄なばかりか、かえって騒動が起こりそうなを見て、水を持って来させ、群衆の前で手を洗って言った。「この人の血について、わたしには責任がない。お前たちの問題だ。」民はこぞって答えた。「その血の責任は、我々と子孫にある。」そこで、ピラトはバラバを釈放し、イエスを鞭打ってから、十字架につけるために引き渡した。

それから、総督の兵士たちは、イエスを総督官邸に連れて行き、部隊の全員をイエスの周りに集めた。そして、イエスの着ている物をはぎ取り、赤い外套を着せ、茨で冠を編んで頭に載せ、また、右手に葦の棒を持たせて、その前にひざまずき、「ユダヤ人の王、万歳」と言って、侮辱した。また、唾を吐きかけ、葦の棒を取り上げて頭をたたき続けた。このようにイエスを侮辱したあげく、外套を脱がせて元の服を着せ、十字架につけるために引いて行った。

兵士たちは出て行くと、シモンという名前のキレネ人に出会ったので、イエスの十字架を無理に担がせた。そして、ゴルゴタという所、すなわち「されこうべの場所」に着くと、苦いものを混ぜたぶどう酒を飲ませようとしたが、イエスはなめただけで、飲もうとされなかった。彼らはイエスを十字架につけると、くじを引いてその服を分け合い、そこに座って見張りをしていた。イエスの頭の上には、「これはユダヤ人の王イエスである」と書いた罪状書きを掲げた。折から、イエスと一緒に二人の強盗が、一人は右にもう一人は左に、十字架につけられていた。そこを通りかかった人々は、頭を振りながらイエスをののしって、言った。「神殿を打ち倒し、三日で建てる者、神の子なら、自分を救ってみろ。そして十字架から降りて来い。」同じように、祭司長たちも律法学者たちや長老たちと一緒に、イエスを侮辱して言った。「他人は救ったのに、自分は救えない。イスラエルの王だ。今すぐ十字架から降りるがいい。そうすれば、信じてやろう。神に頼っているが、神の御心ならば、今すぐ救ってもらえ。『わたしは神の子だ』と言っていたのだから。」一緒に十字架につけられた強盗たちも、同じようにイエスをののしった。さて、昼の十二時に、全地は暗くなり、それが三時まで続いた。三時ごろ、イエスは大声で叫ばれた。「エリ、エリ、レマ、サバクタニ。」これは、「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」という意味である。

そこに居合わせた人々のうちには、これを聞いて、「この人はエリヤを呼んでいる」と言う者もいた。そのうちの一人が、すぐに走り寄り、海綿を取って酸いぶどう酒を含ませ、葦の棒に付けて、イエスに飲ませようとした。ほかの人々は、「待て、エリヤが彼を救いに来るかどうか、見ていよう」と言った。しかし、イエスは再び大声で叫び、息を引き取られた。そのとき、神殿の垂れ幕が上から下まで真っ二つに裂け、地震が起こり、岩が裂け、墓が開いて、眠りについていた多くの聖なる者たちの体が生き返った。そして、イエスの復活の後、墓から出て来て、聖なる都に入り、多くの人々に現れた。百人隊長や一緒にイエスの見張りをしていた人たちは、地震やいろいろの出来事を見て、非常に恐れ、「本当に、この人は神の子だった。」と言った。

朗読解説 一主任司祭より皆様へ一

暖かな季節になってきました。花壇のチューリップなどの春の花が今は盛りと咲きそろっています。教会のあるこの江北の地域は「荒川の五色桜」として有名なところで、荒川の土手や公園ではいろいろの桜の花が咲いています。幼稚園の柿木にも黄緑色の新芽が出て、生命の息吹を感じるこの頃です。そのような季節の教会の典礼も父なる神の「救いの歴史の頂点」とも言える「聖週間」に入ります。主イエスの受難の朗読には様々な立場の人たちが登場します。教会では登場人物のグループごとに朗読者が変わる群読がなされますが、私たちの毎日の姿はどの場面どの人物に当たるのでしょうか。

主の入城の福音（マタイによる福音書 21章 1～11節）

熱狂的にイエスを英雄扱いし、手に棕櫚の枝を持ちエルサレムに凱旋入場する群衆の移ろいやすい姿をマタイは描き出しています。この数日後にはイエスを犯罪者扱いし、「殺せ！」「殺せ！」と叫ぶのです。

第一朗読 (イザヤの預言 50章 4～7節)

この箇所は来るべきメシアの姿を現すものと言われています。受難のイエスの姿だけでなく、疲れた人々を励ますイエス、人々に食べ物を配るイエス、助けを求める声に耳を傾け、癒しを行うイエスの姿もあらわされています。そして救いの生贄となる救い主の使命に対し「逆らわず、退かなかつた」と言っています。

第二朗読 (使徒パウロのフィリピの信徒への手紙 2章 6～11節)

この箇所は初代教会のキリスト理解を伝えるものと言われています。短い文章ですが、キリストが天に昇られて間もなくの初代教会の人々がここまでキリストの姿、使命を理解していたことは驚きに値します。キリストはご自分の使命のために徹底的にへりくだられたが(下降)、父なる神はそのことゆえに「あらゆる名に勝る名を与えられた(上昇)。初代教会のキリスト賛歌と言われるゆえんです。

受難の朗読 (マタイによる福音書 27章 11～54節)

マタイは主イエスの受難の姿を手取るようわかる描写で記しています。後世のキリスト者にぜひイエスの姿、人間の救いへの神の確固たる強さを感じさせ、人間のイエスに対する心情(妬み、裏切り、保身、無関心)を描き出しています。マタイは弟子の一人でしたが、イエスの受難の時のどこにもその姿はありません。それなのにマタイはイエスの受難の様子をまるでそこにいたかのように事細かに伝えています。イエスを置いて逃げていた負い目を感じつつ、それでもイエスが自分を信じて復活の姿を見せて励ましてくれたことに感動したのでしょう。福音書を記すにあたって、マタイは自分がいなかった部分も含めて一生懸命調査し、イエスがなさったことを仔細漏らさず書きたかったのでしょう。そして「主イエスは復活して今も生きておられる」ことを皆に知らせたかったのでしょう。イエス

の受難の時の人々の姿、殊に弟子たちの姿は私たちの姿でもあります。今この現代においてもイエス・キリストは地球のあらゆるところで迫害されています。私たちは今どこに逃げて隠れているのでしょうか。主イエスの復活を信じる私たちは弟子たちの様に主の復活を伝えるために、それぞれのできることで動き出さねばなりません。



「大勢の群衆が自分の服を道に敷き、他の人々は木の枝を切って道に敷いた」(マタイ 21・8)

P.S.

聖週間特に聖なる三日間の典礼(木曜日・金曜日)は夕方の 19:30 から行われます。土曜日の夕方の復活徹夜祭は 19:00 から行われます。聖週間は「典礼の頂点」と言われており、一年の内で特に大切な期間です。都合をつけてご参加いただければと思います。

**カトリック足立教会
主任司祭 野口重光**